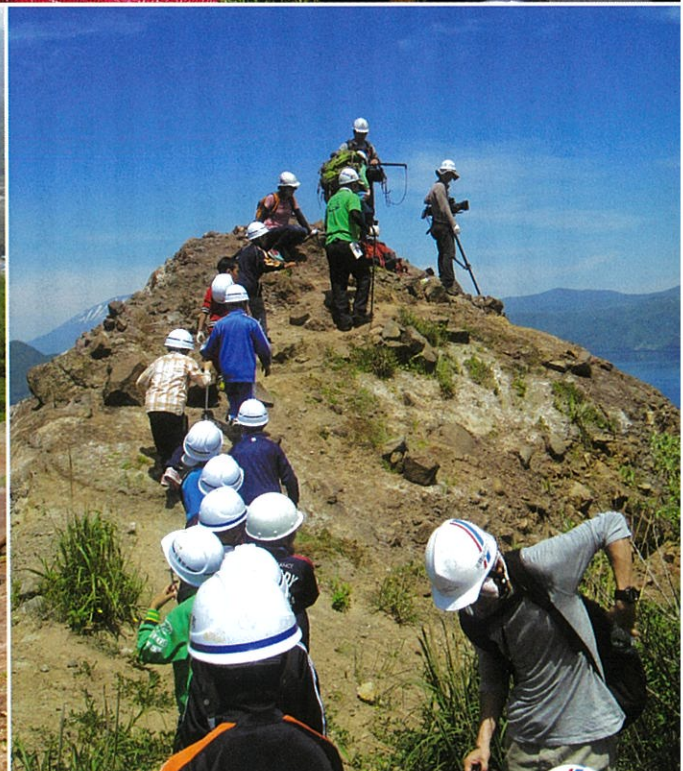


ジオツアーにより 減災文化を次世代に伝える

北海道壮瞥町 NPO法人有珠山周辺地域ジオパーク友の会





会の活動のルーツ

(1) 昭和和山を我が子とした三松正夫の心

代表、三松三郎の義父である三松正夫氏は戦時下、地元の壮瞥町の郵便局長を務め、素人ながら科学者に代わって独自の手法で火山成長の記録を続け、後にミッツダイアグラムと呼ばれる昭和和山生成日記を発表し、世界で初めて表畑から火山が誕生する一部始終を観察した男として、世界の火山学者から高い評価を受けた。

その後、正夫の奔走により昭和和山は国の特別天然記念物に指定された。正夫は火山を末代までの貴重な生体標本として残すことを決意し、全財産をなげうって昭和和山の土地を買い取り、その保護に努めた。

(2) 1977 噴火での失敗

昭和和山生成の32年後の1977年、有珠山は活動を再開した。噴火は爆発の32時間前に前兆地震が始まったが、当日は有珠山山麓で昭和和山爆発再現花火大会が開催されていた。後の当会代表となる三松三郎氏が大会中止を主催者に申し入れたところ一蹴され、十分な観測体制が整わない中、地鳴りが起きる状況下で花火大会は強行された。翌朝、晴れ渡った空に噴煙が立ち昇り、5年にわたる有珠山の噴火活動が始まった。

もし、花火大会の最中に噴火が始まったとしたら、阿鼻叫喚の地獄絵となっていたであろう。

(3) 科学者と連携した防災教育・社会教育の重要性

噴火収束後、地域防災よりも観光復興が優先という地域の雰囲気危機感を抱いた三松三郎氏は、1983年から壮瞥町教育委員会と連携し、子供郷土史講座を開講し、地元の小学生たちに昭和和山登山と噴気孔での地熱や溶岩ドームの登頂など「地球は生きている」ことを実感させる教育活動を実施してきた。

77年有珠山噴火後、北海道大学理学部付属有珠火山観測所長

でもあった岡田教授は北大有珠火山観測所にて有珠山を観察し続け、犠牲者を出さないために、有珠火山の特徴や傾向、次期噴火の備えを住民に説いてきた。

こうした中、起きたのが2000年有珠山噴火であり、住民はいち早く避難行動を取った。これは普段から火山との共生や災害を減らすための学習会で岡田教授らの講話を聴講し、いざというときに行政・民間・科学者に加え、報道機関と連携した防災のテトラヘドロン（三角錐）と呼ばれる相互の連携が効果をもたらしたことと思われる。

こうした学習効果を重視した三松代表や自治体担当者らがエコミュージアム構想という理念のもと、地域の魅力や災害を減らす文化を伝える活動を通じて、ガイド等の経済活性化を含めた地域づくりを行う団体として平成16年11月に「そうべつエコミュージアム友の会」を発足させた。

会の活動

友の会はそうした科学者や先人の活動や思いを民間団体として後世に受け継ぐ団体である。ガイド活動やジオツアーの実践を行い、お互いに「顔の見える」関係を築き、次の噴火の際には速やかに避難ができるような人づくりを目指す。

2009年、洞爺湖有珠山ジオパークが世界ジオパークに認定されたのを契機に、洞爺湖有珠山周辺のエリア全体に活動域を拡げ、「有珠山周辺地域ジオパーク友の会」と名称変更をし、思いに賛同する地域住民が次々に入会した。会員は有珠山周辺の歴史や性格について学び、20〜30年に1度噴火を繰り返す有珠山の火山活動に対する備えを共有し、一般の住民やツアー参加者にも伝える活動をしている。これは火山活動の無い平時はジオガイドやフィールドワークを行い、経済活動や地球を楽しむ活動を通じて





相互に交流し、正しく恐れる減災文化や、自然と向き合う人々の暮らしの豊かさを伝えるという意味もある。

平成29年度には1977有珠山噴火40周年記念フォーラムを主催し、当時日本火山学会会長であった石原和弘氏などの有識者を迎え、次なる噴火に備えるテーマで講演会を行ったほか、噴火の起こった火口原に立ち入る学習会を実施した。

会では火山調査研究事業も行い、全国の火山系ジオパークとの交流を通じて、民間レベルでの交流やジオパーク全国大会での発表等も行っている。

活動の効果

会が協力する壮瞥町の子供郷土史講座では受講した小学生が後に壮瞥町役場の職員となったり、火山学習会で興味を覚えた地域住民が「洞爺湖有珠火山マイスター」試験を受験、地域の防災語り部の担い手として活躍するケースも出ている。

有珠火山防災の担い手の登竜门的な活動としてジオ友のジオツアーが認知され、毎年地域の新聞に行事募集が行われ、即完売となるなど人気の登山学習会となっている。普段、何気なく見ている火山を学び、歴史や科学的知見を学ぶことを通じ、地域に「噴火で人は死なせない」という地域共通のバトンを次世代につなげ根付かせる効果が期待される。

将来に向けて

住民が皆、火山の知識を得て、「平時は火山を含む自然に親しみ楽しみ、有事の際には素早く行動できる力をつけること」を目指し、行政と住民の潤滑油の役割を果たし、豊かな住みよい災害に強いまちづくりに貢献する活動を今後も取り組んでいきたい。

